

釈尊の敬虔に思う

猪俣康光

—

聖徳太子の十七憲法第二条に「篤く三宝を敬へ、三宝とは仏法僧なり」とあるは、人のよく知るところである。大英帝国を脅威ならしめた、印度の聖雄ガンディは「執持真諦」(Satya graha)を標語となしていた。彼の勇猛なる回教太祖ムハマツトは「アラ―神の外に神あることなし、ムハマツトはその使徒なり」(There is no god but. allah, and mukammad is his Apostle)と神の前に跪いていた。イエス・キリストは、ゴルコッタの山上にて、神の啓示にふれ「神を試みるのではなくして、むしろ、終始子として父なる神に仕えることである」と決意を固めて伝道を開始した。

世界に存在する、宗教の諸開祖は、いずれも、自己の信ずる正法に対して敬虔なる一使徒であった。

—

最高の哲学的真理と宗教的真信と道徳的真行を人類に顕示し、無上の大智見と無辺の大慈悲とを円具された、三界

無二の大聖釈尊が、先仏及び正法に對して、如何に謙虚であつたであらうか。

宗教の創唱者中には、その言動が誇大妄想的、邪見、憍慢に馳せたものが往々にあるが、釈尊の人格、教説、行蹟の上には、邪見、我執、憍慢の片影を發見することはできない。

成道以前の、釈尊は真理に對する探求者であつたが、衆生の人心と濁惡なる社会に、莊嚴なる淨仏国土を建立すべき聖務を負うていることを自覚していた。

釈尊においては、自己のみが、真理に對する占有者であるというソフキスト風の憍慢心は見いだすことはできない。

三

巴利語の原始仏教聖典の中に、正法に對する、釈尊の敬虔な態度を伝えた、床しい物語がある。

落葉翻々として舞ふ、秋晴れの一日、釈尊は阿難陀尊者と共に、或る田舎を遊行した。

釈尊は

「落葉を汝の掌に充たせよ」

と阿難陀に命じた。

阿難陀は唯々として、世尊の命に従つた。

その時、世尊は

「阿難陀よ、それが秋の落葉のすべてであるか」

と問を發した。

「世尊よ、私が掌に掬うた以外に無数の落葉が存在しています」

と阿難陀が、言下に答えた。

その時、世尊は

「真理も、秋の落葉と同様に無量無数に存在している、私が把握した真理は、お前の手にしている落葉ほど少量なのだ」

と慈訓を垂れたといわれている。

人天三界の教主釈尊にして、猶かくの如く謙譲であった。三世十方の諸教に散存している一切の真理に対して、おしめない敬意を表していたのである。

四

釈尊は、自己所証の正法をもって、古聖の遺宝であるとなし、自身が正法の発見者であるというやうな、僞慢な態度はなく、先聖及び古仏の歩んだ古道をつましやかに辿ったのである。

巴利語壇一阿含部（四の二十五）に

この道は、先聖の歩み給ひし所なり

巴利語阿含経（十二の七十五）

譬へば、人ありて林中に入り、先人の踏破せし足跡に従って古城を発見し、是を修營して新城を再興する如く、我も亦、過去の諸仏の古道を歩みて正覚に到達することを得たり。

と釈尊は、古聖の踏み分けた古くして、しかも、永劫に新しい無上道の一旅人たることを、最高の光榮と感じていた。

レオナルド・ダ・ヴンチは

「真理は、時の娘」

と先哲の発見し開拓した、聖道を歩むことが、何して屈辱であらうか。

五

五大河が、大海に帰入すれば、一味の鹹水となるが如く、釈尊在世中の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷は、世尊に對して、最上の帰依を惜しまなかったのである。

釈尊の偉大なる人格を中軸として、組織された、原始仏教々団は、和合 (sangha)、無諍 (avivada) 共同 (sam-agga) を標語として成立された。

尊貴な婆羅門族や刹帝利族も、その族名を棄て、周陀と同一に釈子沙門 (Sdmana Sakiyaputtiya) といふ謙遜な称号を光榮としたのである。

六

原始仏教々団は、一八異部に分岐したが、しかし、これらの異部の聖徒は、同一の僧団に安住して、和合衆たる実をうしなわなかったのである。西歴紀元六世紀に、印度を遍歴した、大唐の玄奘三蔵が、その大唐西域記の中に明記

し、史実を伝えている。

釈尊は滅後において、発生すべきこれらの異部に関して

「これらの諸部は、我が所説の聖經が結びし十二異果を容るゝ器具にして、その間に優劣高下の差異なきこと猶大海の水の一味になるが如けん、譬へば一人の生みし十二子が皆共に孝順なるが如く、これらの異部も亦、皆わが正法を顕揚せん」

と予言したと伝へられている。

この、予言説は後代の仏教徒の作為したものであらうけれども、原始仏教諸分派は、この予言に記してある如く、協和して、仏日を輝かすことに協力したことは事実である。

七

時代の推移と、人心の変動とに随順して、多岐に分裂した原始仏教々団の場合、必しも、呪ふべきことではなかつたが、釈尊の滅後になって、釈尊に対する尊敬の念が、その教を伝える、専門家たちへうつり、出家の人々は、「持律誦經を專業とする我等の集団は優越権を占有す」という邪見、驕慢の心を起し、敬虔と和合の精神を失ひ、一般人にはできないことをしたり、説いたりして、一種の權威を作ろうとした、そして、外来の思想の影響によって、それらの哲学や宗教に対抗して、仏教の權威を示す必要もあつて、ついに精密巧緻な思弁哲学が作り上げられるにいたつた。

ウエルズが「仏教の興起と流布」に

「釈尊の倫理と教義は、殆んど姿を消してしまい、幾多の学説が、発生して繁茂した、そして、形而上学的煩瑣哲学という安価な地上の電灯のために、肝心の釈尊の教えという星の光はおおい消されてしまった」と痛烈なる批判を下している。

このようにして、印度仏教々団が、時代の変遷と共に、民衆から棄てられるやうになった。

八

観るに、日本仏教々団は、聖徳太子の護持養育によって、現代まで久住することを得たが、現代の日本仏教々団が、社会から葬られようとしている現情を考察するに、それは種々の宗派の分岐と、その態度において、「我が法のみ尊し」といふ、法執、法我を起し、互に反目し、釈尊滅後における、持律誦經者にもまして、不持律不誦經者になりさがったことに起因することを、痛嘆すべきである。

道元禪師が

「如来の在世には全く二教なく、全く二師なし」

と訓誡している。現代の日本仏教々徒は、すべからず、釈尊及び原始教団の正法に対する敬虔なる態度を学び、法執、法我を没却して、聖徳太子の十七条憲法の初章において、宣布した

和ぐを以て貴しと為し、忤ふ無きを旨となす

を指針として、正法に対して敬虔なりし、釈尊の忠順なる原始仏教僧伽に対して、面目をほどこさねばならない。西欧の哲学研究者が好んで

「大哲カントに帰えれ」と唱えるがごとく、

我々日本仏教々徒はすべからく、

「真理に対して敬虔なりし釈尊に帰えれ」と主張するものである。

◇

釈尊いわく（パーサーデイカ経）

疑を超え、苦惱を離れ、安らぎを樂しみ、食欲を除き、神々を含む世界を導く人、——かかる人を入道による勝者▽であると言の覚れる人は説く。

この世で最上のもを最上のものであると知り、ここで法を説き判別する人、疑を断ち不動なる聖者を、修行者どものうちに第二の入道を説く者▽と呼ぶ。

善く説かれた法句なる道に生き、みずから制し、念いあり、とがの無いことばを奉じている人を、修行者どものうちに、第三の入道によって生きる者▽と呼ぶ。

善く警戒を守っている者のふりをして、押しづよくして、家門を汚し、傲慢で、いつわりあり、自制心なく、おしゃべりで、しかも殊勝らしく行う者——入道を汚す者▽である

学識あり聰明な在家の聖なる信徒は入かれら（四種の修行者）はすべてかくのごとくである▽と知って、かれらを洞察し、このように見ても、かれの信はなくならない。かれはどうして、汚れたものと汚れていないものと、淨い者と淨くない者とを同一視することがあろうか。